

白兵<連載ver>;

コズエマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キセキの世代と言われる五人の上の世代にその五人とも劣らない才能がある選手がいた。その選手はその五人の漫画のような選手ではなかったが、バスケットボールがとでも上手だった。

よくあるオリ主最強系です。

前書いてた短編の連載verです。

目次

泥酔	20
大人	15
理不尽	8
loni	1

lonl

光がうるさいほど分散している。

応援と落胆の声が目に見えるほど大きい。

決勝4Q残り三秒、点差は一点

敵が最大限の警戒をこちらにしてくる。

俺はトップからウイング付近に移動しハンドオフボールを貰い、攻め手を決める。

ここで決めれば負け、その事実到手の末端が冷えてくる。だが体はこわばっておらず、リラックスできている。感覚と判断が鋭敏だ。

相手はこちらのゴール付近のシュートを警戒しているのがわかる。

ドリブルにてカットインし、右のエルボー付近にてプルアップのフェイダウエイシュートを放った。

高い打点から放たれた放物線は全員の視線を集めながら籠の中に収まっていった。

1点差、ブザービートで勝利をもぎ取った。

体育館の清掃が終わり、ここからは自由時間だ。だが、赤司がこっちに寄って来た。

「先輩、こちらに来てください」

「いやいや、もう全体練終わったんだろ、だから今個人練してるのに。それに来週から全中予選が始まるだろ。だから集中させてくれよ。」

「ちよつとの時間です、付き合ってください。」

「えー、じゃあちよつとだけだよ」

少し不機嫌になりながら赤司についていく。Bチームのコートで練習していたから、Aコートまでは距離がある。ワックスがけしたフロアリングに電球が照り返しが俺に鈍く跳ね返ってくる。そんなことに気をとめながら赤司についていくと場所は体育館の端の、校長が喋るところについた。そこには新入部員の黄瀬と青峰が寄りかかりながら喋っていた。

「黄瀬、この人はこの人はレギュラーの白石さんだ、ポジションはsf / sg、場合によつてはpgができる。ポジションの兼ね合いにお前のライバルとなる人だ。」

黄瀬か。あまり好きじゃない人だ。才能にものを言わせてAチームにいったやつだ。これまでキツイ練習してきた同級生の顔が浮かばれない。部活とはそういうものだと言われれば是だが、納得はできない。それと、ライバルとなる人という言葉が気になる。バスケットを始めたての初心者とライバルとはこれまでの練習の時間、才能そしてこれまでスタメンに立ってきた俺の矜持が許されない。

赤司は何を考えて俺をここに呼んだのだろうか。本当に挨拶だけか？よくわからな

い。

「白石さんは今から黄瀬とloniをしてもらいたいのですが、良いですか」

loniか、まあいいかやっておこう。断ると赤司に詰め寄られる気がして面倒だ。

「いいよー。」

「9点先取でドリブル無制限としましょう。」

「了解、20分後にAコートに集合しよう。」

「わかりました、それじゃあ20分後よろしくお願いします。」

loniをするのは久しぶりだ。ハンドリングの練習して時間を待とうかな。身体的要素、運動神経、運動能力、経験、色々理由はあるけどどう考えても俺が勝つだろうし。でも赤司がloniしてほしいってことは実力差そんなないのかな。だが、勝つのは俺だ。

赤司っちー、何であいつとしなきゃいけないんですかー

そんな声が聞こえてきた。そんな嘲笑が混じった一言が俺の内に秘めている闘志を燃やす。loni、正直そんなにやる気ではなかったけどやってやろうじゃねえか。

ウォームアップをしながら時計で時間を確認する。もう時間だ。

「どっちが最初にする」

「そっちが最初でいいですよ」

「そう・・・、まあその舐めた感じ俺はいいと思うけどね」

黄瀬は白石と距離を取ってドライブを警戒している。白石のスリーを捨てたディフェンス。もし打ってきてても、自分なら反応できるといふ確信が見て取れる。

そしたらいきなり白石は3pが打った。黄瀬は反応することができない、それくらいクイックリリースだった。放たれた低い弾道のボールはバックボードには当たらずに綺麗に吸い込まれた。

「どうだ、少しはやる気が起きたか。そんなに距離をとって、お前くらいのディフェンスだったらどれだけバスケは楽なんだろうな」

黄瀬は何も言い返せなかった。次に黄瀬は距離を取り、スリー、ドライブどちらも反応できる態勢を取った。

白石はジャブステップのあと、スリーポイントを打った。黄瀬は反応したが、シュートリリースの速さについて行けず、白石の二本目のシュートも吸い込まれた。

「だったら拍子抜けだな、天才少年君。次のスリーポイント決められたら俺の勝ちだぞ」
黄瀬はその言葉で絶望と憤怒が大きくなった。なんでこんな奴に今さっきあったやつに言われなきゃいけないのか。今からどうすれば今目の前にいる敵に勝てるのか。

そんな言葉がらせん状に頭を流れている。だが答えは出ない。ただ、自分の全力を出すしかないという結論が出た。

次に白石はシュートのフェイント、そしてジャブステップを流れるように行う。そのとき、シュートのときに反応していた、さらに重心が浮いているためスリーを警戒していると判断。

その後、右にドライブした後、黄瀬が対応しようと過剰に反応したため、左に切り替えした後、もう一度右に切り返しステップバックをスリーポイントを打つ体制まで持ってきた。

その際に黄瀬はその身体能力を生かして白石の目の前にまでチェックをしようとしたが、右に重心が乗っていたためジャンプが出来ず、地面に這いつくばる形になった。その後、白石は冷静に決め勝負を決定づけた。

9-0 白石の勝利である。

その後、白石は今までの雰囲気が変わった。なんとというか雰囲気が柔らかくなったように感じた。

「いやーすごいセンスあるね、黄瀬君！このまま続けていけばすごい選手になると思うよ！もう青峰なんて目じゃないね頑張つてね！」

「いやー、なんか・・・ありがとうございます。」

「黄瀬君、バスケット選手で一番怖いのは怪我だから、怪我のケアだけはしといてね、それじゃあまたね！」

そう言つてその人は元気そうに去つていった。

その後、黄瀬は動揺しながら青峰に耳打ちをした。

「なんか良い人だったつすよねあの人。On Off がキツチリしているんすかね」

「あの人は、勝負事に関してだけ性格が悪いからな。この前白石さんと昼休みに大富豪をしていたらイカサマしてきたんだよな。シャツフルのとき自分にいい配役が来るようにしてた。」

「なんでそんなことわかつたつんすか。」

「そりゃあ、俺目と反射神経がいいからさ、それくらいわかるよ。」

とドヤ顔しながら言った。

黄瀬は青峰の凄さを再確認したところで、ふと疑問に思つたことを口にした。

「そういえば、青峰っちは白石さんとlonlしたことあるんですか？」

そう言うと、青峰は下をうつ向いた。

「実は俺、白石さんにまだ勝てたことが無いんだよな、俺ほど速くはないから止めやすいと思つてたけど、なんつーかキレが他の人とは段違いなんだよ。それとあの人、ディフェンスメチャクチャ上手いんだよ。」

そう言った後、悔しさの中にどこか嬉しそうな表情が浮かんだ。

「(この人こんな表情できるんだ...) 青峰つちも負けちやつたんですね。そんなに実力があるなんて知らなかつたつす。」

黄瀬は色々なことに愕然としたが、表情には出さないように努めた。

「だから、今日のこととはそんなに落ち込むなよ。俺も次は勝てる、そう思いながら挑み続けるよ。」

青峰はそう言つて笑つた。

そんな青峰の姿を見たくはなかつた。誰でも楽勝に勝てる、大きく輝く一等星。尊大な王様であり、挑戦者を受け付ける偉人であつてほしかつた。だが、何と言えばいいのかわからない。言葉が喉に引っかかる。

結局、黄瀬はただうつ向いて、静寂の時間が流れていた。

時計は午後九時を回ろうとしていた。

理不尽

場所は東京の某体育館。二階の観客席ではまばらに人たちが座っており、それぞれが思い思いに話していた。

「今年も帝光が行きそうだな。」

「いや、今年はB中学が全国行くかもよ。」

「お前は試合見てないからそんなこと言えるんだよ。スタメン四人が二年生なんだけど全員バケモノみたいに上手いんだよ。さらにそれを率いている三年生の白石はU15に選ばれる。さらにはオリンピックの選考メンバーに選ばれたって言われているって噂だぜ。でもB中学には実測っていうスリーの上手い選手がいるらしいからな。」

「まじ？ そうなら帝光一択だな。でもB中学も出てほしいな。」

「もう、始まるぜ。そろそろ見なきや。」

「ああ」

二人はコートの方に目を向けると、帝光とB中学のセンターがティップオフにて試合が始まった。

ボールは赤司が運んでいる。ウイング付近にいた青峰にボールを渡し、アイソレー

シヨンにて軽く点を取り、この試合初得点を決めた。

その後、実測にボールを渡し、白石と相對する。

「あなた、帝光の唯一の三年の選手なんですよ？ということh「紫原あ！こいつは今からアイツするから、外れた際のリバウンドとれるように準備しろ！青峰はその際に速攻で攻めれるように！んでお前今なんて言った？」

「いえ、何でもないわ」

「そうか、なら話かけるな。気が散る」

その瞬間実測のボールをステイルし、白石がボールを運ぶ。レイアップをしようとしたら実測が後ろから止めようとブロックを飛ぶ。しかし、白石は冷静にシュートフェイクを行った後、実測にボディを当て、シュートを放つ。そのシュートはゴールに吸い込まれてエンドワンを取る。その後、白石は冷静にフリースローを決め、点差は五点となった

（ちくしょう！私が焦ったせいでファールを貰った。だけど私がスリーを決めれば大丈夫！）

再び実測がボールを渡され、地を打とうとしたが、体が触れずにブロックされ、天を打とうとするが、白石の大きな手に封じ込められブロックされる。

そしてまた帝光の二回の速攻となり、そのままレイ九アップを決めその差は九点に

なった。

（相手の白石は何故か私の天と地を見分けられている。私のクセが見分けられているのだろうか。いや、私には世代最強のアウトサイドシューターと自信がある。これまで決めた切ったシュート一本一本が、これまで費やした時間が私に活力をくれる。

私にバスケットボールをしてもよいと言ってくれる。

天と地が攻略されたからなんだ。私には必殺技があるじゃない。

アウトサイドは私の領域だ!!)

p gからボールを貰った実測は虚空の体制に入る。白石は体が硬直して実測の前に入らない。目の前は自由の空だ。

（勝った！これで私の領域は守られた。）

そのまま実測が打ったスリーは虚しく空を切った。

これには相手の監督も困惑し、チームメートも驚いている。なぜなら実測のスリーが外れるところを見たことが無かったからである。スリーが一試合に一本しか入らず負けたことも、逆に全部入って勝利したこともあった。しかし、フリーのスリーをエアボールしたことはなかった。

そのボールを紫原が取り、白石に渡すとトランジションで素早くハーフコートに入った。相手はレイアップを警戒している。そしてそのままトップの位置でプルアップスリーを打とうとした。相手は完全に虚を突かれたため、ディフェンスをもう諦めて、外れた際のリバウンドを狙っている。ただ一人、実測のみ必死にチェックに入った。白石のスリーを1%の確率でも外す可能性に、全身全霊で体が動いた。

(やばい。このままだと負ける。絶対に嫌だ。このまま負けるのは)
実測は負けたくないという一心で白石の方に手を伸ばした。その必死さが仇となった。

白石がスリーを打った手に実測の手が触れ、審判の笛が鳴った。白石のスリーは低い弾道でそのまま籠に入った。

四点プレイである。試合では滅多に見れないプレイに会場がどよめく。

「うおおおおお！中学校の試合で四点プレイが見られるのかよ」

「なんつーか、完全に心を折りにきたプレイだったな。でも普通速攻でスリー狙うか？しかもプルアップ。本当に恐ろしいよ。」

対して白石は、単なるレイアップと同じようにどや顔をせず、普通の顔をしていた。実測はその顔がとても恐ろしく感じた。

白石がフリースローを決め、帝光、十四点差のリードを取ったところでB中学タイムアウトを取った。実測は何も考えることはできなかった。

このままずると行き、実測のスリーポイントは不調のまま、結局、102―64で帝光学園が圧勝した。

白石はこの日スリー6本を含む38得点13リバウンド8アシスト6ブロック5ステールだった。

帰りは緑間と白石が喋っていた。

「どうしたんだ緑間」

「いえ、今日は何故実測はスリーが入らなかったのですかと聞きたくて。」

「あーそれは、緑間はシュートを打つときに何を意識しているっ。」

緑間は一呼吸置いてこのように答えた。

「シユートを打つときつて、何も考えてませんよ」

「そう、何も考えないことが重要なんだよ。明鏡止水っていうの？その精神が重要なんだけど、相手の実測は焦燥感に駆られてしまった。練習のまま打てれば誰でも入るんだけど、そうじゃないのは試合の緊張感、相手に負けたくないという闘争心それがシユートを落とさせる。だから実測はシユートが入らなかつた。まー実測が怪我していた可能性も否定はできないけどね」

「俺は人知を尽くして天命を待っています。だから、シユートは外さない。」

「そういう人知を尽くす、俺で言えば練習をするだけどその積み重ね、その日の、打つ瞬間のメンタリテイがシユートを外さないんだよ。シユートを外しても平常心でいることが大事なんだ。まあでもお前はシユートを外さないんだろうなー。」

白石はからかいながらそう言った。

そういうと、緑間は恥ずかしそうに眼鏡をかけなおした。緑間の顔は少し笑っているように見えた。

「あと一つ質問ですが、何で天と地を見分けられたんですか。」

「これ言うの恥ずかしいけど、ビデオを見まくったら癖の一つや二つ見つけることができるよ」

（この人、本当に今日勝ちたかったんだな。俺ももつと人事を尽くさねば）
今日を持って一つの勝者が決まり、全国大会予選は終わった。

帝光学園全国大会出場決定

削除 投稿 編集 結合 編集履歴 執筆中小説一覧 現在3019字 ページの
一番上に飛ぶ

大人

コツコツと革靴の歩く音が廊下に響いている。

歩いているのは白金耕造、帝光バスケットボール部監督である。

白金耕造が歩いているのは、帝光学園理事長にて今後のバスケット部における方針について呼ばれたためである

クロマツにて作られた重厚感のあるドアを三回ほどノックし、部屋に入った。

何度入っても校長室に入るのは慣れない。真正面には理事長が座っており、両横にあるショーケースには今まで作られてきた多くの栄光が鎮座してある。その栄光が自身に迫ってくるように感じ、胸が締め付けられるように感じる。

「白銀君、先日は全中の全国大会の出場を決めたいね。毎度のことながら誠におめでとう。君たちの活躍がわが校のこれからの栄光を示唆しているように感じるよ」。

「とんでもありません。これもすべてこれまで努力を重ねられた可愛い生徒たちのお陰です。それに、これまで指揮されてきたのは真田先生です。私はただ生徒たちの実力を出してあげてるだけですよ」

「微笑ましいですね。これからも精進してください」

「ありがたきお言葉です」

これまで全国大会に出場したときもあつたが、校長室に赴くことはなかった。全国大会優勝をしたときくらいだ。つまり私を呼んだんだということは何かあるはずだ。次の一言を注意深く白銀は聞いた。

「さて、わかっているだろうが、本題というのは一軍コーチの役割を真田コーチに譲らないかということだ。君は心臓に持病を抱えているのだろう。ここからは真田さんその立場を受け渡して自身の闘病に専念する時期が来たと思っっているのだが、どうだろうか」

白銀は一呼吸を置き、次のように答えた。

「確かに私は持病を抱えていますですが、私の負担を軽減していただいているために真田先生などが支えていただいています」

「ということは見送るといふことかな。」

「とはいえ、私の持病を抱えているのも事実ですので、来年か再来年に監督の立場を譲ろうと考えています。」

そのように白銀が言うのと理事長が苦い顔をした。

「成程…、端的に言うが、三年のレギュラーの子をレギュラーから外してほしい。」

白銀は耳を疑った。なぜ部活の一生徒に対して職権乱用をするのか、意味が分からない

かった

「なぜでしょうか。」

「今レギュラーは二年生が四人、三年生が一人だ。ここで、三年生をレギュラーから外すと全員が二年生だ。これはかなりの宣伝効果があると考えている。今年、中途入部してきた二年生は何でも入部してから二週間で一軍に入つたと聞いたではないか。かなり美男子だと聞いているぞ。メディアの宣伝効果がとてもある。中学二年生だけで優勝は主婦層の人々にはかなり響くから入学を希望する生徒が増えるだろう。」

だが、三年の彼はそこまでの利用価値がない。精々、ローカルメディアに乗る、良ければ大手のテレビ局が取り上げてくれるだろうがそれだけだ。

もう一度聞くぞ白銀君、監督辞めるもしくは生徒を変えてくれないか。」

「で、ですが、彼も今年は三年生です。勉強も優秀ですが彼は強豪校の推薦が届くだろうと言われています。彼はリーダーシップもあり、引張つて行く素質もあります。絶対に必要になる時間が来ます。」

「では聞くがその彼がいなくなった程度でわが校の優勝する確率が厳しくなる。そう思っているのか？」

「そうです！彼のオフフェンス、ディフェンス、バスケットIQは勝負所では必ず必要になります！」

「そうか、そこまで言うのなら仕方がないか、「失礼します」

白銀は話を遮るように話を切り上げ、理事長室から退室した。失礼なことは承知だが、切り上げなければ何か悪いことが起きるように感じた。

今までのことを整理した場合、私の監督交代を急いだのも納得できる。私の病気は表側の理由で裏側は真田コーチにすることで都合の良い傀儡にする予定なのだろう。今のことも、今後のことも考える必要があるが、ありそうだ。

ちようど前の方を真田が通った。白銀は真田に追いつくようにせわしなく歩いた。

「白銀監督、どうなさったのですか」

「真田先生、白石のことはどのように思っているのでしょうか」

その問いに、真田は間髪言わず答えた。

「白石は素晴らしい選手です。さらに素晴らしい人間性です。それがどうしたのでしょうか。」

「いや、今理事長からの通達によって白石のレギュラーが降ろされそうになった。それは何としても守らなければならない。そう思いませんか？」

「なっ……、そんなことは許されるはずがありません!!白石はこの部活内で大切な戦力なんだ。それに、今の二年生は実力はありますが、精神的に未熟な生徒が多い。その中でプレーを諫められる能力があるのはとても貴重です。」

「その決意があれば答えは同じでしょう」

「ええ。子供たちは私たちが守らなければなりません。」

「昼休みが終わります。また部活内で会いましょう。では」

「ええ、失礼します」

二人は軽く会釈をした後、二人はそれぞれの持ち場に戻った。その顔は何か決意をしたように見えた。

七月のじめじめとした暑さにより、肌には夏の到来を予感しているように感じた。アツい季節はもうすぐである

泥酔

夜の九時半のとき、桃井は青峰と塾から家まで帰る途中だった。

これは、親から強制に入らされた青峰が塾をサボらないように道草をくわないようにお眼付役として一緒に帰るためだ。

「もう！大ちゃんは塾の授業のときは寝ないでって言うてるでしょ！何で寝ちやうのよ！」

「そりゃあお前、つまんないからに決まってるからじゃん」

「聞く前に寝るからつまんないかわからないでしょ！おもしろいし役に立つから聞きなよ！」

桃井の話を流すために適当に相づちをする。

「ははは、まあそういうこともあるよな。でも俺は全中があるんだよ勉強している暇はないのに。」

「でも今は勉強のときなの！」「お！バスケットボールの音が聞こえてくんじゃん。俺も入れてもらおう」ちよつと待ってよ！」

青峰に置いていかれた桃井がついていく。道には長い雑草が生えており、舗装された

アスファルトはボコボコだ。青峰の背中はどうんと遠くなってくる。草を分けていくと昨日降ったであろう水がだんだん増えており、水溜まりが増えてくる。こんなところにはバスケットコートがあるのだろうか、そんなことを思いながら進んでいく。桃井の体感では三分ほど道なき道を進むと急に草が開けた。

そこには立派なバスケットコートがあり、そこには二人の大男がいた。青峰と白石である。白石は上半身裸でバスケットボールをゴールに入れようとしており、横にある運動服は水入りバケツに入れた雑巾のように濡れていた。今日は雨が降っていなかったはずだ。

一方の青峰は白石と対して尻餅をついているように見えた。いわゆるアンクルブレイクというやつだ。そう思っている間に白石がシュートを決め勝負を決した

二人で 1 on 1 をしている光景を何度も見ているので、また今日も白石さんと 1 on 1 をして、今日も負けたのだろう。そんなことを思った。

「くそ！何でまた負けるんだよ」

「そりゃあさ、俺一年長く生きてるからだよ。後、やつぱセンスかな（笑）」

ヘラヘラしながらそう言うのと、青峰は真剣な顔をしながら

「いや、本当に何をしたらあんたに勝てるんだよ。ほかのどんなことよりも俺は勝ちたい。」

そういうと白石は据わった目をし、青峰を見ていた。

「そんなに俺に近づきたいなら俺についてきなよ。」

「マジっすか！俺ついていきます。さつき悪いが俺ちよつと行ってくるわ。」

「私もちよつとついていく。私も興味があるし。」

そういうと白石は服を着て白石と青峰、桃井は歩き出した。その時は会話は無かった。何か話そうと桃井はしようとしたが、雰囲気は許してくれなかった。

五分ほど歩き、ついた場所は海であつた。

「もう一回言うぞ、お前は本当に俺に勝ちたいのか」

「ああ、俺は本当に勝ちたい。何よりも勝ちたい。」

「じゃあ着いてこい。」

そう言うのと白石は海に入つていった。

どんどん進み青峰の腰辺りまで進んだ。服はもうびしょびしょだ。

この人は狂っている。俺は勝つ方法を知りたかつた。練習方法を知りたかつたのに何で海に入っているんだ。

そう思い、立ち止まった。

そのとき、白石は言った。

「お前は勝ちたいんじゃないのか」

「ああ、俺は勝ちたい、だけど……。」

「本当に勝ちたいのか」

「勝ちたい！」

「ならば進め」

そう言いながら白石は進んでいく。

桃井は海岸沿いに座っていた。なぜかこのまま青峰が遠くに行ってしまうそうだった。

「大ちゃん、戻ってきなよ！この人はやばいよ。」

そう言ってきた。

青峰が止まりそうになった。

「どうした勝ちたくないのか」

そう言うと白石は進んでいった。

青峰は戸惑いながらも進む。

青峰の肩辺りまで水面が来たら、いきなり白石は青峰の後頭部を掴み、海に顔面を付けた。

やばい、俺は死ぬかもしれない。海水を飲んだ。からい、苦しい、苦しい。意識が曖昧になり、もうやばいと思う。もがいても駄目だ。息がしたい、息がしたい。

その時白石は顔を上にあげた。

「今、何がしたかったか言え！」

「い……、息がしたかった」

そう言うのと、白石は言った。

「お前が息がしたい、そう思うくらい強く勝利を望め！そうしたときにやっと土俵台に勝てるんだ。！」

「お前が誰かと遊びに行つてるとき、お菓子を食べているとき、寝ているとき、俺は全ての時間をバスケに費やしている。人生を費やして努力をしているんだ。だから今のままだとお前とはライバルだとは思ったこともないし、これからもないだろう。」

「誰かに褒められなければできない、そういう人生でも良いが俺には絶対に勝てない。」

そう言い白石は立ち去った。

呆然としてしていると、桃井が駆け寄ってきた。

「大丈夫？何か痛いところはない。あの人、大ちゃんを殺そうとしてきたんだよ？あんな人の言うことは聞かなくていいよ」

「ああ……、大丈夫だ、俺は何も聞いてないし、何も心配ないぜ。大丈夫だ」

青峰の目は揺れて動いているように見えた。

海に映る月は燦然と輝いていた。